

## ネルヴァルの『<sup>シュヴァルツヴァルト</sup>黒い森』をめぐる2系統のテキストについて

小林 宣之

### 『黒い森』をめぐる2系統のテキスト

『黒い森』はルイ14世治世の末期、スペイン継承戦争さなかの1702年に時代設定をした歴史劇の梗概で、ヴィラルル麾下のフランス軍と神聖ローマ帝国皇帝レオポルト1世軍との交戦に、ナントの勅令廃止後苛烈を極める新教徒弾圧の経緯を絡めた筋立てが取られている。筆者は数年前、このごく短い未完成の作品を翻訳する機会を得た際<sup>1)</sup>、プレイヤード叢書新版『ネルヴァル全集』第1巻(1989年)収録のテキスト<sup>2)</sup>を底本としたのだが、校訂者クロード・ピショワのテキスト作成の手続きに多少納得のいかない部分が残った。ピショワは解題に次のように記している。

この梗概が公表されたのは、シャルル・モンスレ『死後の肖像、未発表書簡および複<sup>フアクシモリ</sup>写を付す』(アシル・フォール、1866年、242～255ページ)の「ジェラルド・ド・ネルヴァル」に当てられた章末尾においてである<sup>3)</sup>。冒頭には「時代背景」の複写が挿入されている。ジゼル・マリーは『ジェラルド・ド・ネルヴァルの未発表作品』(メルキュール・ド・フランス、1939年、226～235ページ)において、ごく些細なものではあるが、モンスレ版とは異なる重要な異文を含むテキスト<sup>4)</sup>を公にした。マリーに特有の不正確さを見るにつけ、彼女が実際に自筆草稿に当たったのかどうか疑わしくなるが、これらの異文は、マリー版を校正した注意深い第三者の配慮から生じた可能性もある。われわれはモンスレの書物に収録されているテキストを再録する<sup>5)</sup>。

1) 『ネルヴァル全集 歴史への旅』(筑摩書房、1997年11月)、217～223ページ(本文)、734～736ページ(注解)。

2) «*La Forêt Noire*», in Gérard de Nerval, *Ceuvres complètes*, I, sous la direction de Jean Guillaume et Claude Pichois, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1989, pp.725-731. 以後プレイヤード版全集第1巻からの引用は、略号NPIIをもって示す。

3) «*LA FORET NOIRE*», in Charles Monselet, *Portraits après décès. Avec Lettres inédites et Fac-Simile*, Achille Faure, 1866, pp.242-255. モンスレは後に、11人の人物を取り上げたこの著書の一部の章を差し替え、表題も『蘇りし人々』と改めた上で再刊しているが、ネルヴァルの章に変更はないので、以後モンスレ版と言う時は、アシル・フォール書店から刊行された『死後の肖像』収録のテキストを指すことにする。Voir Charles Monselet, *Les Ressuscités*, Paris, Calmann Lévy/ Librairie Nouvelle, 1876, pp.211-225.

4) «*LA FORET NOIRE*», in Gisèle Marie, *Des inédits de Gérard de Nerval*, Mercure de France, 1939, pp.227-235. ピショワは226ページからとしているが、このページは「時代背景」複写の掲載ページであり、本文は227ページから。

5) NPII, p.1758.

ピショワも言うように、ネルヴァルの生前未発表だった戯曲梗概には<自筆草稿>が存在し、これに基づくテキストが、シャルル・モンズレ(1825～1888)の『死後の肖像』という著作に初めて公表された。その後ジゼル・マリーが、やはり同じ<自筆草稿>から別個に起こした<sup>6)</sup>テキストも存在する。これら2つの版には看過できない異同が見られるが、1938年以降草稿の消息が絶えたため、マリー版以後の校訂者は原典に付けず、先行する2版を基礎にテキストを編むしかない。これを前提にピショワは、その<不正確さ>ゆえにマリー版を退けモンズレの版に拠る、と宣言しているのである。ピショワの言うマリー版の不正確さを筆者は実感しかね、モンズレのテキストの入手を待って、その実際を具に検討したいと考えた。本稿はその結果報告である。

### 『黒い森』の自筆草稿

最大の課題は自筆草稿の発見であるが、現在に至るもその行方は杳として知れない。ピショワは同じ解題に、『死後の肖像』から問題の自筆草稿をめぐるモンズレの証言を紹介している。筆者もこれを原典から引用しておこう。

ジェラルールは時折、一緒に芝居の仕事をしようとして誘ってくれた。彼はずいぶん前から、「ニコラ・フラメル」を主題とする劇に没頭していて、ある夜その話をしてくれた。また別の折には、全文自筆の『黒い森』という題を付けた小型のノートを持って来た。「読んでみてくれないか」と彼は言うのだった。「これを元に一緒に仕事ができるようなら、明日そう言ってくれ。」翌日、ジェラルール・ド・ネルヴァルはやって来なかった。ハーグかサンリス、それともサン＝ジェルマンに出かけてしまったのだ。それきり、二人ともその小型のノートのことは忘れてしまった。最近になってそのノートが見つかったので、ここに紹介する。彼の偏愛し、その後もいくつかの作品で取り上げた、あのブリザシエという人物が登場する<sup>7)</sup>。

ここでモンズレが触れている「全文自筆の『黒い森』という題を付けた小型のノート(un petit cahier tout écrit de sa main, intitulé : *la Forêt Noire*)」は、ネルヴァルの生前には持ち主に返却されることがなかった。「それきり、二人ともその小型のノートのことは忘れてしまった(Nous oubliâmes tous les deux le petit cahier.)」からである。『死後の肖像』の刊行後もノートが1885年までモンズレの手許にあったことが、この年行なわれたモンズレ蔵書売立目録の「103番。ジェラルール・

6) ジゼルの父親アリステッド・マリーは、後述するように、ジュール・クラレチーの蔵書売立(1918年)で『黒い森』の自筆草稿を入手し、その後監修を任されたシャンピオン版全集に彼自身の版を収録するつもりでいたらしい。1932年に全集の刊行が中絶されて以後も自版を編む意向を抱いていたが、果たせないまま1938年に死去してしまった。その遺志を継いだジゼル・マリーが、全集未収録のその他の草稿作品と共に『ジェラルール・ド・ネルヴァルの未発表作品』を刊行したのである。Voir «Avertissement» pour *Des inédits de Gérard de Nerval*, pp.7-8.

7) *Portraits après décès*, p.241. Voir aussi *NPI I*, p.1758.

ド・ネルヴァル。黒い森。小型四折版16ページ、厚紙装丁の自筆草稿」という記述によって裏付けられる<sup>8)</sup>。

その後の草稿の足取りについて、ジャン・セヌリエ『ジェラルール・ド・ネルヴァル書誌試論』(1959年)に報告がある。「シャルル・モンズレの蔵書に由来し、見返しにモンズレの<蔵書票>が貼られた厚紙装丁の小冊は、ジュール・クラレチーが入手した後、アリスチッド・マリーの手に渡った。現在の所有者の身元は知られていない<sup>9)</sup>。」とここでセヌリエは草稿そのものについて、「十二折版、15ページの表ページに劇梗概を書き写した自筆草稿」と記述し、「時代背景1ページ、第1幕3ページ、第2幕9ページ、第3幕4ページ、および1つの断章」という補足を記しているが、これを足すと17ページ強という計算になり、矛盾が生じる。いずれにせよ、セヌリエはこうした詳細なデータを一体どこから得たのだろうか。

セヌリエの報告にある、自筆草稿の2番目の所有者ジュール・クラレチー(1840～1913)についても、その蔵書売立時の記録があることが、ミシェル・ブリックス『ジェラルール・ド・ネルヴァル作品書誌便覧』(1997年)に報告されているが<sup>10)</sup>、残念ながら筆者は未見である。

3人目の、今日知られている最後の草稿所有者アリスチッド・マリー(1862～1938)の蔵書売立は1938年に行なわれ、その目録には「159 ネルヴァル(ジェラルール・ド)。『黒い森』。梗概、表ページに記された13ページにわたる十二折版クロス装丁の自筆草稿」とある<sup>11)</sup>。

8) *Catalogue de livres modernes et d'autographes provenant de la bibliothèque de M. Charles Monselet* dont la vente aura lieu le Samedi 7 Février 1885, à 2 heures et 1/2 précises de l'après-midi, Hôtel des Commissaires-Priseurs, rue Drouot (Salle n° 4), par le ministère de M<sup>e</sup> G. Boulland, commissaire-priseur, rue des Petits-Champs, 26, assisté de M. A. Voisin, libraire. Paris, A. Voisin, libraire-expert, 37, rue Mazarine, 37, 1885, p.16. 『黒い森』に関する記述は以下の通り(斜線は改行を示す。以下同様)。<103. Gérard de Nerval. —La Forêt Noire. Manuscrit autographe de 16 pages petit in-4, cart./ Ce manuscrit, entièrement écrit de la main de Gérard de Nerval, renferme le scénario d'un drame qu'il devait faire en collaboration avec M. Monselet. Ce projet, comme tant d'autres rêves du pauvre Gérard, ne fut jamais réalisé.> モンズレの蔵書売立目録は、今夏ナミュールのジェラルール・ド・ネルヴァル研究センターに滞在中偶見し、必要部分のコピーを入手できた。ミシェル・ブリックスの好意に感謝したい。

9) Jean Senelier, *Gérard de Nerval. Essai de bibliographie*, A. G. Nizet, 1959, p.106. 『黒い森』に関する記述は以下の通り。<323. La Forêt Noire. Manuscrit autographe in-12, 15 p., transcrit sur recto, d'un scénario dramatique : Donnée historique, 1 p. —Premier acte, 3 p. —Second acte, 9 p. —Troisième acte, 4 p. et un fragment./ Ce fascicule cartonné provenant de la Bibliothèque de Charles Monselet, porte son *ex-libris* collé sur la page de garde, il fut acquis par Jules Claretie, et ensuite par Aristide Marie. Nous ignorons l'identité du propriétaire actuel./ Ce scénario a été publié pour la première fois par Charles Monselet dans son livre : Les Ressuscités. Portraits après décès. Paris, Faure, 1866, in-16. Il a été réimpr. dans le livre de Gisèle Marie : Des inédits de Gérard de Nerval (1939).>

10) Michel Brix, *Manuel bibliographique des œuvres de Gérard de Nerval, Etudes nervaliennes et romantiques*, XI, Presses universitaires de Namur, 1997, p.316. クラレチーの蔵書売立目録に関する記述は注12)を参照。

11) *Bibliothèque Aristide Marie. Livres anciens, romantiques, éditions originales et livres illustrés, keepsakes. Livres modernes, éditions originales et livres illustrés, manuscrits de Gérard de Nerval, autographes divers. Peintures, aquarelles, albums, gravures et lithographies de l'époque romantique*. Paris, Hôtel Drouot, Salle N° 8, les mardi 14, mercredi 15 et jeudi 16 juin 1938, p.47. 『黒い森』に関する記述は以下の通り。<159—NERVAL (Gérard de). **La Forêt Noire**. Scénario, manuscrit autographe écrit au recto de 13 pages in-12, cart. bradel./ **Précieux**

現在のところ最新のネルヴァル書誌である前述のブリックス『ネルヴァル作品書誌便覧』には「モンズレ草稿、十二折版13ページ、クロス装丁」と記されており<sup>12)</sup>、アリストッド・マリー蔵書売立目録の記述に従っていると思われるが、あるいはクラレチーの蔵書売立目録にも同様の記述があるのかもしれない。

いずれにしても、書誌上も、実物をもとに作成された記録はモンズレ、クラレチー、マリーの蔵書売立目録のみであり、セヌリエもブリックスも何らかの典拠によって自筆草稿の詳細を記述しているに過ぎない。したがって現状では、ノートの実態は未だ藪の中にあって見定め難いと言う他ない。

### モンズレ版とマリー版の間に見られる異同

以上の経緯を説明した上で、本稿の実質的な作業に入ろう。『黒い森』は、セヌリエの記述にもあるように「時代背景」<sub>1</sub>、「第1幕」<sub>1</sub>、「第2幕」<sub>1</sub>、「第3幕」<sub>1</sub>の4つのテキストから構成されているのだが、幸いモンズレもマリーも、このうちの「時代背景」については自筆草稿の複写を掲げている。全文の複写が残されなかったことが悔やまれるが、それでも部分的とはいえ、「時代背景」に関してのみは自筆草稿とモンズレ、マリー各版との比較が可能になり、その結果を敷衍して梗概全体に推測を及ぼす余地が生じる。本稿ではその方針を採りたい。

「黒い森」という表題と「時代背景」という章題は、複写ではそれぞれ *La Forêt Noire*, *Donnée historique* となっている。モンズレ版の表記は *LA FORÊT NOIRE*, *Donnée historique*、マリー版では *LA FORET NOIRE*, *DONNÉE HISTORIQUE* となっていていずれも複写に忠実とは言えないが、なるほどピショワの言う通り、モンズレの方が忠実度は多少上かもしれない。それでは、同様に複写を参照できるピショワ自身の表記はどうなっているのか。彼は *La Forêt-Noire* および *DONNÉE HISTORIQUE* と表記していて、複写との相違はモンズレ、マリーの版と大同小異である。斜体と大文字・小文字の別が、モンズレ版とちょうど逆になっているのがむしろいぶかしい。

次に本文について、モンズレ版と複写を比較してみよう。まず、複写では大文字で始められている「皇帝 (Empereur)」、「カミザール (Camisards)」、「辺境伯 (Margrave)」という名詞がすべて *empereur*, *camisards*, *margrave* と小文字表記に置き換えられ、また古風な綴字で書かれた「新教徒たち (protestans)」、「分遣

---

**manuscrit autographe** (inédit)./ Ce scénario a été élaboré en 1840, lors d'un voyage de Gérard de Nerval en Allemagne et de son séjour hivernal à Vienne. La pièce ne fut jamais réalisée./ DE LA BIBLIOTHÈQUE DE CHARLES MONSELET. »

12) Michel Brix, *op.cit.*, pp.315-316. 『黒い森』に関する記述は以下の通り。「14.56. Manuscrit Monselet, 13 pages in-12, cartonné bradel./ «La Forêt Noire» [Scénario]. Ce manuscrit a d'abord appartenu à Charles Monselet, qui en a transcrit le texte dans *Portraits après décès. Avec lettres inédites et fac-similé* (Paris, Achille Faure, 1866, p.242-255 ; le fac-similé de la première page du manuscrit est encarté entre les p.218 et 219 de l'ouvrage). Le document appartient ensuite à Jules Claretie (voir la *Catalogue de la bibliothèque de feu M. Jules Claretie*, 1<sup>ère</sup> partie, vente Drouot des 14-19 janvier 1918, pièce 1379), puis à Aristide Marie (Voir *B Marie*, 1926, ainsi que le catalogue la *Vente Marie*, 1938, n° 159 [reproduction de la première page]). On perd la trace du manuscrit après 1938. »

隊 (détachemens)」、「隠れ家 (azile)」といった名詞もそれぞれ、protestants、détachements、asile という通常の表記に訂正されていることが注目される。マリー版は複写に忠実、ピショワ版はモンズレ版に忠実である。

モンズレ版と複写のもう 1 つの顕著な相違は、複写のテキストが 3 段落から構成されているのに対し、モンズレ版では 2 段落構成に変更されている点である。具体的に言えば、複写の第 1 段落と第 2 段落がモンズレ版では改行されず、1 つの段落として扱われているのである。マリー版は複写を忠実に再現し、ピショワ版もこれに倣っている。

最後に些細な点ではあるが、モンズレは接続詞 et をすべて & に置き換え<sup>13)</sup>、マリー、ピショワ版では複写のままであることも指摘しておこう。

複写の残されている「時代背景」について行なった比較検討の結果を総括すれば、ピショワの主張とは逆に、むしろ概ねマリー版が自筆草稿に忠実、モンズレ版が < 不正確 > ということになるのではなかろうか。そして、「マリーに特有の不正確さ」を言い、「モンズレの書物に収録されているテキストを再録する」というピショワの宣言も随所で裏切られている。この事実を念頭に置きながら、複写の存在しない「第 1 幕」、「第 2 幕」、「第 3 幕」について、モンズレ版とマリー版の比較を続けてみよう。

名詞語頭の大字・小文字の別、古風な綴字の保存か修正か、という両版の相違は、逐一報告しないが 3 幕を通じて一貫して見られる特徴である。また、モンズレが段落分けをせず、マリーが行なっている例も「第 2 幕」と「第 3 幕」にそれぞれ 1 箇所ずつ見られる。ピショワは、前者についてはマリーに、後者についてはモンズレに従っている。

新たに生じる特徴の 1 つとして、単語の読み取りに際して生じる転記上の相違に注目してみよう。本文中のこの種の異同は全部で 8 箇所及び、その一部をピショワは「重要な異文 (variantes significatives)」として注記している。番号を付して列挙すれば、「第 1 幕」における 1) le poste (モンズレ版、下線強調は筆者、以下同様) と la porte (マリー版)、2) une jeune fille qui l'accompagne (モンズレ版) と une jeune fille qui les accompagne (マリー版)、3) aux sons du tambour (モンズレ版) と aux sons d'un tambour (マリー版)、4) ses chants sont le tableau (モンズレ版) と ses chants font le tableau (マリー版)、「第 2 幕」における 5) au massacre du château de son père (モンズレ版) と au massacre du château de son frère (マリー版)、「第 3 幕」における 6) un parti de troupes débandées ont été ramenées (モンズレ版) と un parti de troupes débandées a été ramené (マリー版)、7) des prisonniers saisis dans la sortie (モンズレ版) と des prisonniers faits dans la sortie (マリー版)、8) l'arrivée de l'électeur roi des Romains (モンズレ版) と l'arrivée au camp de l'Électeur roi des Romains (マリー版) がそのすべてである。このうち 1) の「部署」と「市門」の齟齬について、ピショワは例外的にマリー版を支持しているが、3) 4) 5) の異同について

13) モンズレ自身、『蘇りし人々』では & を et に戻している。注 3) 参照。

は注記していない。ところで、最後の8)の例は、判読に伴う誤差といったレベルを越えた、転記者の注意度そのものが問われる試金石的な場合ではないだろうか。「陣地に (au camp)」という原文にない字句を加えるより、最初からある字句を見落とすことの方がはるかに蓋然性が高いと思われる。これと似たケースだが、「第2幕」を意味する語句、DEUXIÈME ACTE (モンズレ版)とSECONDE ACTE (マリー版)の相違も同じ自筆草稿からの転写としては信じられない相違と言える。

もう1つの顕著な特徴は、モンズレ版に見られる句読点の多用とマリー版に見られるその少なさである。この特徴は複写の残っている「時代背景」の部分には存在しなかった(逆に両版に共通の誤記として、複写にない読点を加えたケースを2箇所指摘できる)。これまでの例から推して、原文にない句読点をモンズレが読者の便を考えて付加したのではないか、というのが筆者の推測である。

最後に、一見語頭の大文字・小文字の違いに見えて、実際はそのレベルを逸脱する恐れのある例を引こう。第2幕に頻出するsibylle (モンズレ版)とSybille、Sibylle (マリー版)の異同である。この場合問題なのはマリー版に見られるSybilleという表記であって、これは作中重要な役目を担うバーデン辺境伯夫人シビルを指す固有名詞と考えざるを得ない。Sibylleの方は、「神託を告げる巫女」、転じて「女占い師・予言者」を意味する普通名詞の語頭を大文字にするか、小文字にするかの問題として処理できる。

### ジャン・リシェの版

結論を述べる前に、『黒い森』にはプレイヤーード新版の校訂者クロード・ピショワが故意に言い落としている版がもう1つあることを指摘しておきたい。ジャン・リシェが、プレイヤーード旧版『ネルヴァル作品集』を補う目的で刊行したミナール版『ジェラルド・ド・ネルヴァル補遺作品集』第3巻(1965)に収録したテクスト<sup>14)</sup>である。おそらくリシェは実際にはモンズレ版を参照していないと思われる<sup>15)</sup>のだが、「辺境伯夫人」という副題を付したことを除き、ほぼマリー版を踏襲しているので、本稿では煩雑を避けあえて言及をしなかった。

### 結論

モンズレとジゼル・マリーの版を比較することで筆者が得た結論は、「時代背景」の複写との照合結果から、マリー版の方がモンズレ版よりも自筆草稿に忠実であり、信頼に値するということである。今仮に翻訳に従事するとしたら、ためらわず、ピショワ版ではなくマリー版を底本に選ぶだろう。既にプレイヤーード叢書に

14) «LA FORÊT NOIRE [LA MARGRAVE]», in *Œuvres complémentaires de Gérard de Nerval*, III, textes réunis et présentés par Jean Richer, «Nouvelle Bibliothèque Nervalienne», M. J. Minard, Lettres Modernes, 1965, pp.393-401.

15) リシェは先行する版を紹介するに際し、モンズレの著書を *Les Ressuscités—Portraits après décès* (1866)としている。Voir *Œuvres complémentaires de Gérard de Nerval*, III, p.402, note 1. 再刊本との混同はジャン・セヌリエの書誌からの孫引きによると思われる。注8)参照。

において全集・書簡集を編んでいるボードレール研究の泰斗であり、ジャン・ギヨームと共に同叢書の『ネルヴァル全集』（全3巻、1984～1993）を共同監修しているピシヨワの校訂版を批判する結果になったのは遺憾の極みだが、筆者の結論も、自筆草稿全体を精査した上のものでない以上、所詮仮説の域を出るものではない。

本稿では紙幅の関係で、『黒い森』のテキスト校訂に関する話題に絞って論じたが、この作品がネルヴァル作品全体に占める位置、執筆時期の推定等の問題については、稿を改めて論じたい。

〔付記〕本稿脱稿後、ミシェル・ブリックスから『黒い森』の自筆草稿に関する驚くべき情報を得た。*Histoires littéraires* という筆者には未知の雑誌の最新号（2002年3月）168ページによれば、Clavreuilという書店の*Cent livres pour un centenaire*（2001年2月）と題するカタログに『黒い森』の草稿が掲載されている、と言うのである。草稿のページ数が13ページであること、既に売却済みで売価は25,000ユーロだったこと以外の詳細は不明だそうで、ブリックス自身、クラヴルイユ書店に照会中と言う。

（大手前大学助教授）